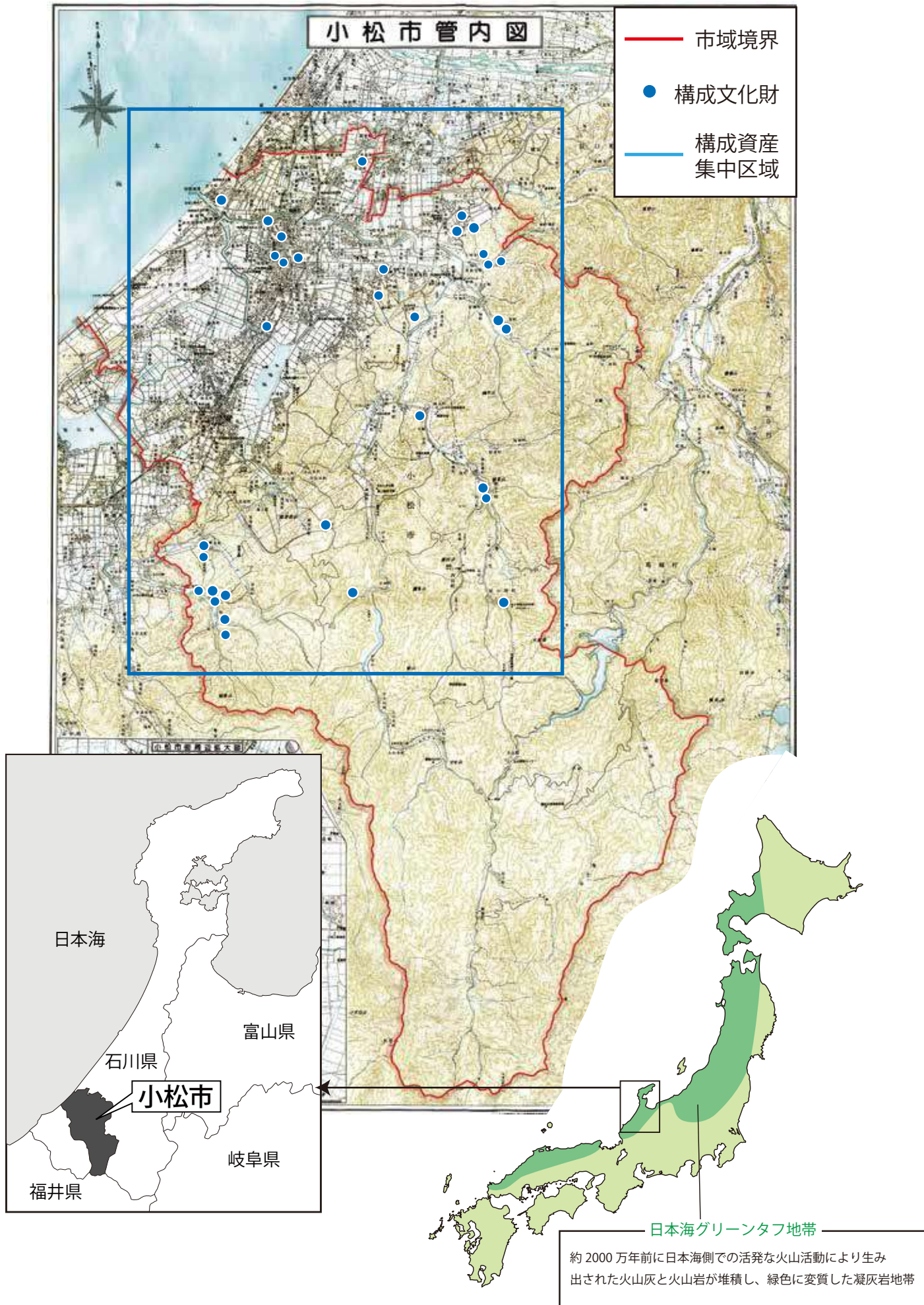


① 申請者	小松市	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D <b>Ⓔ</b>	
③ タイトル				
『 <sup>しゆぎよく</sup> 珠玉と歩む物語』小松 ～時の流れの中で磨き上げた石の文化～				
④ ストーリーの概要(200字程度)				
<p>小松の人々は、弥生時代の<sup>へきぎよく</sup>碧玉の玉づくりを始まりとして2300年にわたり、金や銅の鉱石、メノウ、オパール、水晶、碧玉の宝石群、良質の凝灰岩石材、九谷焼原石の陶石などの石の資源を見出し、時代のニーズに応じて、現代の技術をもってしても再現が困難な高度な加工技術を磨き上げ、ヤマト王権の諸王たちが権威の象徴として挙げて求めるなど、人・モノ・技術が交流する豊かな石の文化を築き上げてきている。</p>				
				
八日市地方遺跡の玉づくり		滝ヶ原石切り場 (上) とアーチ型石橋 (下)		
⑤ 担当者連絡先				
担当者氏名	小松市 にぎわい交流部 観光文化課			
電話	(0761) 24-8076	FAX	(0761) 23-6404	
E-mail	kankou@city.komatsu.lg.jp			
住所	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地			

市町村の位置図 (地図等)





構成文化財の位置図 (地図等)



- 石材・鉱物産地
- 制作・工房関連地
- 代表的石造建造物 (市内に点在)
- 天然記念物・風景地
- ★ 構成文化財保管施設 (文化財所在地設置の保管施設を除く)



## ストーリー

## 弥生時代の王たちを魅了した小松の「碧玉」アクセサリ



八日市地方遺跡出土碧玉製管玉（国重要文化財）

今から2300年前の弥生時代、日本では自然や生命、権力への象徴として「緑」への憧れが強く、朝鮮半島から伝わった「緑の玉」の国産化を目指し、原石産地探しが始まる。良質で豊富な碧玉が採取できたのは小松を含め全国で4ヶ所に限られ、特に小松の碧玉は、きめ細かさ<sup>いしのか</sup>と埋蔵量で他に秀でていた。小松の弥生人は、<sup>な</sup>那谷・<sup>ほ</sup>菩提・<sup>たい</sup>滝ヶ原で産出される碧玉を原料に、八日市地方で「玉づくり」を開始する。それまでの軟質の緑色凝灰岩による管玉製作から、硬質で加工が困難な碧玉での管玉製作を可能とする当時の最先端加工技術であり、小松で実現したその工程は碧玉を石鋸で方形柱に切断していき、砥石で擦って円柱に磨き上げたものを、太さ0.7mmのメノウ製石針で1mmの孔を開け、直径2mmの細くて精巧な管玉を作り上げるものであった。現代でも復刻困難な驚異的な加工技術によって作られた管玉は、糸魚川産ヒスイを加工した勾玉と組み合わせた首飾りや頭飾りとして、日本海沿岸交易を経て九州へと届けられ、弥生の王たちを魅了した。その後、八日市の玉づくり技術は、さらに東の碧玉産地へと伝わっていくのである。



直径2ミリの碧玉に石の針で1ミリの孔を開ける

## 古墳時代に日本を席卷する腕飾りの誕生と中世に花開いた「小松の凝灰岩文化」

古墳時代前期、ヤマトに強大な勢力が誕生し、新たに大型の装身具として石製の腕輪生産が始まると、加工しやすくきめ細かな石質を持つ小松の緑色凝灰岩が注目を集める。精巧な彫刻加工を施したデザイン性の高さに優れた<sup>くわがたいし</sup>鍬形石などの腕輪は、当時のヤマト王権の諸王がステータスシンボルとして挙げて求め、日本各地へと広まっていく。



河田山古墳群の横穴式石室

古墳時代後半には、新たに建築部材として石材の活用が始まる。小松市東部の里山には良質の凝灰岩が広範囲に分布し、これを切り出し加工する技術が小松へ導入され、大型古墳の横穴式石室に使用された。特に、河田山古墳群では、飛鳥時代のアーチ式天井を持つ切石積み横穴式石室が発見され、石積みのズレを防止する鍵手積み技法など国内最先端の石室構築技術を有していた。天井部がアーチ構造の横穴式石室は国内唯一であり、朝鮮半島の百濟王墓との類似性から、大陸との繋がりの中で直接、小松に伝わったものと推察される。

古代まで、王の墓や国の建築物など、特別な建造物の建築部材利用が主であった切石技術は、中世に入ると鉄製の石工道具の進化と普及により、<sup>あんか</sup>行火や<sup>いんろ</sup>囲炉裏、井戸枠、火鉢等の生活道具のほか、<sup>とう</sup>灯籠や石仏等の信仰具、五輪塔等の様々な石塔など、細かな細工を施す石造彫刻品の制作も活発となり、生活・信仰・文化に密着した石の利用が浸透していく。材質の堅牢さと耐火性、錆びない、腐らない石の素材特性は、庶民に広く受け入れられ、材料調達の手軽さもあり、小松の凝灰岩文化が花開いた時代であった。

## 利常公の城の整備とまちづくり、近世の石切り場開発

小松のまちづくりは、江戸初期に加賀前田家三代利常公が隠居し、小松に居を構えたことに始まる。利常公は加賀一向一揆の拠点城の小松城を大規模改修し、石垣で区画された城内には多くの水堀と島を配置する浮城の景観を持つ名城として生まれ変わらせた。利常公の城づくりへのこだわりは本丸<sup>やぐらだい</sup>櫓台の石垣にも表現されている。当期に新技法として定着し始めた「切込み接ぎ」を採用し、色調の異なる石材をランダムに配置するなどデザイン性豊かな石垣構築を



小松城本丸櫓台の石垣

行くとともに、城内や町家を区画する堀や河川の護岸、橋台にも使用されている。小松城の石垣は『前田家文書』に鵜川石の記載があり、梯川流域に位置する鵜川地区に石切り場を設け、河川で城やまちなかへと運び込んだことがうかがえる。

利常公以降、近世のまちづくりが本格化する中、建築部材としての石材需要が高まり、市内では本格的な石切り場の開発が始まる。現在、確認される25ヶ所以上の石切り場の多くは当期に開かれ、色調や硬さなど細部の特質により使い分けがなされ、門や塀、土台の建築部材や庭の石造彫刻物、信仰用具、生活用具として利用され、石工技術が定着していく。

もう一つの石の物語「ジャパングタニを生んだ陶石と地域経済を支えた豊かな鉱石・宝石群」

明治期に欧米でジャパングタニと称賛された九谷焼には、江戸後期に花坂地区で発見された陶石が用いられている。この陶石もまた、地下の流紋岩が熱水作用によって風化した産物であり、小松は全国有数の陶石産出地である。陶石粉碎から九谷焼陶土ができるまでの昔ながらの各工程が今も残り伝えられている。



昔ながらの技法を受け継ぐ九谷焼製土場

また、江戸後期から金平や尾小屋、遊泉寺で金・銅の採掘が確認され、注目を浴びる。特に明治期以降は、尾小屋、遊泉寺の鉱山で銅の産出量が拡大し、大正には全国有数の産出量を誇った。その財は小松だけでなく、明治維新後の加賀百万石の経済をも支えた。

そして、同時期、かつて碧玉で国内を席卷した菩提・那谷のメノウやオパール、そして遊泉寺の紫水晶は「加賀紫」として珍重され、海外への献上品や宝飾品として高く取引された。小松の石資源の豊かさは鉱石、宝石へと広がりを見せ、今でも産出地の個人宅の門塀や、開創1300年の古刹、那谷寺の白く露出した岩山には碧玉の層が見られるほか、境内の庭石や飛び石などに地元産出の様々な宝石群が使われ、市民生活の中に深く溶け込んだ町の姿を見ることが出来る。



碧玉の層も見られ那谷寺の奇岩遊仙境

## 現代に残る石の町並み



観音下石を使用した日本酒醸造の石蔵

近世に開かれた数多くの石切り場のうち、特に水に強く青白い色調が美しい滝ヶ原石や、温もりのある黄色の色調で湿気に強い観音下石は、現在でも切り出しが行われる人気石材で、市内の建造物はもちろん、国会議事堂や甲子園会館など、数々の有名建築物に使われその魅力を伝えている。市内中心部を歩くと趣のある小松町家の町並みに多くの石蔵が残っている。小松町家に石蔵が定着した背景には、昭和初期の二度にわたる大火があった。大火で多くの家屋が焼失する中、耐火性に優れた凝灰岩を壁に使った蔵の大半は焼け残ったことが石蔵を再認識するきっかけとなった。

また、滝ヶ原地区には、明治から昭和初期に築造されたアーチ型石橋が、かつて12橋存在し、今でも6橋残されている。現存する石橋が多数存在する地域は、九州以外では当地のみであり、地域が石とともに育んできた「石の里」の風景を今に残している。この滝ヶ原の旧の石切り場跡では、巨大な石塊を様々な石工道具で丹念に切り出した際の紋様が天井や壁に残り、洞窟を支える石柱と相まって幻想的な空間を醸成している。遊泉寺町や鵜川町の石切り場は、良質の石材を求め隧道状に迷路のように掘り進められた姿が特徴的であり、特に遊泉寺の石切り場跡は、総延長10km、広さ8000㎡に及ぶ巨大地下空間となっており、随所に溜まった地下水が例えようもなく美しい光景を作り出している。



幻想的な石切り場跡（滝ヶ原）

このように、2300年にわたり、小松の人々は大地の恵みである石の資源を見出し、時代のニーズに応じて進化してきた様々な技術、知識を磨き上げ、人・モノ・技術が交流する豊かな石の文化を築き上げてきているのである。

## ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
①	な た ぼだい 那谷・菩提・滝ヶ原 へきぎよく 碧玉産地	未指定 (天然記念物)	弥生時代の王たちを魅了した碧玉製管玉の原石産地。良質の緑色凝灰岩の産地でもあり、弥生時代から古墳時代にかけて、当地の地下資源が古代の装身具を支えた。	
②	ようかいちじかたいせき 八日市地方遺跡 出土品	国重文 (考古資料)	弥生時代の王たちを魅了した碧玉製管玉、管玉加工途中の工程品、管玉製作工具などの一式が出土する玉つくり関係遺物が出土する。これら玉つくり関係の出土品を含め、東西交流の結節点と言える八日市地方遺跡出土品が、小松市埋蔵文化財センターにて収蔵展示されている。	
③	ようかいちじかたいせき 八日市地方遺跡	未指定 (史跡)	碧玉製管玉を製作した玉つくり遺跡であり、北陸最大の弥生中期の拠点集落遺跡。東西のヒト・モノ・ワザが行き交う交流の結節点と位置付けられる遺跡で、碧玉・翡翠など日本海を行き交う宝石の流通拠点でもある。遺跡の一部が「ひととものづくり科学館」の地下に保存されている。	
④	かたやまづたまつくりいせき 片山津玉造遺跡 出土品	未指定 (考古資料)	古墳時代前期に小松の緑色凝灰岩で鋏形石などの腕輪や管玉、勾玉製作を行った加賀市に所在する玉つくり遺跡の出土品。玉つくり工程を示す資料が多く、生産工程を知ることができる。小松市立博物館に収蔵され、見学することができる。	
⑤	こうだやまこふんぐん せきしつ 河田山古墳群の石室	未指定 (史跡公園)	河田山古墳群には飛鳥時代に位置づけられる方墳2基が確認されており、そのいずれもが地元の凝灰岩を使用した切石積み横穴式石室をもつ。天井部が欠損するが、一部天井部へ移行する部分がアーチ状を呈しており、アーチ天井を持つ石室と評価されている。河田山古墳群史跡資料館内に1基が移築復元展示、もう1基は史跡公園内に移設され墳丘復元が行われる。	
⑥	こうだやまこふんぐん 河田山古墳群出土品	未指定 (考古資料)	古墳時代前期・中期と飛鳥時代に位置づけられる河田山古墳の出土資料。管玉や勾玉などの装身具をはじめ、石室古墳より出土した遺物も、河田山古墳群史跡資料館にて収蔵展示されている。	



⑦	じゅくどうやまいせき 十九堂山遺跡石塔群	未指定 (建造物)	古代白鳳期から平安期の古代寺院跡に重複する中世墓群。現在は墓地のため、石塔群があった元の位置から移動しているが、五輪塔や宝篋印塔など、中世に位置づけられる石塔類を複数見ることができる。地元石材を使用している。
⑧	ほとけぜんはか 仏御前墓	市指定 (建造物)	『平家物語』に登場する白拍子「仏御前」の墓とされる地元の原石を使用した石造物。中世のものと言われ、小松市原町内に所在の仏御前の屋敷跡地内に建てられている。
⑨	たきはらせきぞうたそうとう 滝ヶ原石造多層塔	市指定 (建造物)	14世紀に建立されたと推察される高さ225cmを測る大型の石塔。五層の屋根をもち、塔頂部を欠損する。地元滝ヶ原石を用いた最古の石塔例であり、滝ヶ原下村八幡神社境内に所在する。
⑩	たきはらしもむらはちまんじんじゃ 滝ヶ原下村八幡神社 いせき 遺跡	未指定 (史跡)	神社左側に2基の石窟(やぐら)が開口露出する。1基には石塔が並び、背面に梵字が刻まれる。石材は滝ヶ原産と言われ、13世紀から14世紀と推察される。
⑪	かながそはくさんじんじゃけいだい 観音下白山神社境内 いせき 遺跡	未指定 (史跡)	神社左側に石窟(やぐら)が1基開口露出し、内部には石塔が散在する。石材は観音下石と言われ、中世に位置づけられる。
⑫	こまつじょうほんまるやぐらだいしがき 小松城本丸櫓台石垣	市指定 (建造物)	加賀前田家三代利常公が江戸初期に整備した小松城の石垣。割石を丁寧に面取り加工し隙間なく積み上げる切込み接ぎ工法であり、地元の凝灰岩「鶴川石」と金沢の安山岩「戸室石」などをモザイク状に組み合わせ構築する。
⑬	こまつじょうほんまるにしがわいしがき 小松城本丸西側石垣	未指定 (建造物)	本丸櫓台石垣とともに小松城のなかで現地遺存する数少ない石垣。本丸西側の堀を護岸する石垣で、地元の鶴川石を使用される。
⑭	うかわいしきば 鶴川石切り場	未指定 (産業遺産)	古代から近世(小松城の石垣)、そして近代建築物にまで長い時代にわたって多用されてきた角礫凝灰岩石材の産地。大規模な洞窟工場1ヶ所は、ハニベ岩窟院として観光地となっている。
⑮	ゆうせんじいしきば 遊泉寺石切り場	未指定 (産業遺産)	江戸期から採掘がなされた角礫凝灰岩の採掘場。第二次大戦末期には中島飛行機(現・富士重工業)が洞窟を利用して、部品を製造。総延長10km、8000㎡に及ぶ広大な迷路空間となっている。随所に地下水が溜まり、幻想的な光景を創り出している。

⑩	たきがはらいしき ば 滝ヶ原石切り場	未指定 (産業遺産)	文化11年より始まり、現在も採掘が行われる緑色凝灰岩の石切り丁場。現在稼働する石切り場と旧の石切り場があり、前者では大型の電動鋸で掘削された300m以上真っ直ぐに延びる採掘坑が、後者では藩政期から明治期に人力で掘削した採掘坑が見ることができる。
⑪	かながそいしき ば 観音下石切り場	未指定 (産業遺産)	大正初期から始まり、現在も掘削が行われる浮石質凝灰岩の石切り丁場。特徴的な黄色を呈し、湿気に強くカビが生えにくい特徴が評価され、国会議事堂や甲子園ホテルなど、全国の近代建築に利用される。市内各所でも多く見られる石材で、石蔵をはじめとして石塀や門、庭の石造彫刻物などに使用される。
⑫	いしくどうぐ 石工道具	未指定 (民俗資料)	滝ヶ原地区の石切り丁場で使用された石工道具。ゲンノー、各種ツルハシ、各種チョンノと、タガネ、ノミの細工道具などがあり、里山自然学校こまつ滝ヶ原にて展示している。石材の加工技術は、今も市内26件もの石材業者や名工に受け継がれている。
⑬	たきがはら 滝ヶ原アーチ石橋群	市指定 (建造物)	滝ヶ原町に現存する5橋のアーチ型石橋。地元滝ヶ原石を使用した石橋で、隣接する菩提町にも1橋が残る。明治後期から昭和初期に建造されたもの。
⑭	ひがし 東酒造	国登録 (建造物)	観音下石を使った昭和20年代に築造された日本酒醸造所の石蔵。5棟の石蔵が連なり建っている。
⑮	しょううんどう 松雲堂	未指定 (産業遺産)	欧米向け輸出九谷焼、ジャパネクタニの中核を担った九谷焼窯元「松雲堂」をリニューアルした町家型文化施設。施設内には、観音下石と滝ヶ原石を組み合わせた石蔵と九谷焼の上絵付け窯（錦窯）が保存されており、昭和初期の小松町家の雰囲気を感じることができる。
⑯	はなさかとうせきやま 花坂陶石山	未指定 (産業遺産)	1811年に本多貞吉が花坂町で陶石を発見して以降、現在に至るまで当地の陶石が再興九谷焼の主原料として用いられている。
⑰	くたにやきせいどじょう 九谷焼製土場 (九谷セラミック・ ラボラトリーほか)	未指定 (産業遺産)	陶石から九谷焼陶土（坏土）を製作するまでの工程を行う工場。直径1mを超える大きな石車で陶石を破碎し、杵で衝いで不純物を取り除いた後、ふるいにかけて、沈殿、脱水を経て、九谷焼陶土を製造。九谷焼製土所は市内の2ヶ所のみで、昔ながらの工程を見学することができる。



②4	れんぼうしきのぼりがま 連房式登窯 (登窯展示館)	市指定 (建造物)	花坂陶石山に近い近世から続く九谷焼の中心地である八幡に現存する唯一の九谷焼登窯。素地焼成する本焼段階の窯で、操業状態のまま保存されており、登窯構造や型おこし成形、素地焼成等の工程を展示する。付近には九谷工房が集中する。
②5	にしきがま 錦窯 (錦窯展示館)	未指定 (産業遺産)	九谷焼の上絵付け窯で、低火度焼成窯のため、小松町家の工房内に備え付けられている。人間国宝を輩出した徳田八十吉の工房であり、現在は錦窯展示館として、初代から三代の八十吉作品を展示する。
②6	おごや 尾小屋鉱山	未指定 (産業遺産)	江戸初期に発見された鉱山で、銅の他に金・鉛・亜鉛を産出。銅は明治から大正に生産量が増大し、日本有数の産出量を誇る。昭和46年の閉山まで地域の基幹産業として支え、そのための鉄道も敷かれた。坑道跡を整備したマインロードとそれに隣接して建設された尾小屋鉱山資料館では、鉱山の歴史や鉱山道具、そして様々な鉱物が展示される。
②7	かなひらきんざん 金平金山	未指定 (産業遺産)	江戸後期に加賀藩財政を支えた金山。現地は立ち入りできないが、博物館が所蔵する当時の文献や金山絵巻は非常に貴重で市指定文化財。
②8	ゆうせんじどうざん 遊泉寺銅山	未指定 (産業遺産)	尾小屋鉱山と並ぶ大規模銅山。江戸後期に発見され、明治・大正と大規模に採掘された。現地には真吹炉が2基遺存している。
②9	なたでら 那谷寺 (本堂ほか5棟)	国重文 (建造物)	「白山之記」に白山三カ寺のひとつとされる古刹で、岩屋寺とも称される。一向一揆による戦火で荒廃したが、江戸初期、加賀前田家三代利常公が再建した。屋根には地元凝灰岩を用いた石棟が用いられ、同様の石棟構造が粟津温泉の老舗旅館「法師」にも取り入れられている。
③0	なたでらくりていえん 那谷寺庫裏庭園	国名勝 (史跡)	那谷寺再建時に造営された江戸初期の様式を持つ庭園遺構。泉水を含む主庭と書院北側の平庭および茶室「如是庵」の茶庭で構成される。園内に配される庭石や飛び石には碧玉やメノウ、水晶、オパールなどの地元産の宝石類が使用される。
③1	まえかわすいろごかんぐん 前川水路護岸群	未指定 (風景地)	南加賀に所在する3つの潟湖、加賀三湖と梯川を繋ぐ前川水路の護岸風景。前川に面する家々には、舟の出入りが可能な石蔵が連なり、水路護岸には地元石材の石組が施される。

③②	ひょうがわ いしがき 日用川の石垣	未指定 (建造物)	19世紀後半頃、地震で破損した小松城石垣を修復にきた人足が日用の有川家に逗留し構築したとの伝承が伝わる。近世末期の地元石材による護岸石垣。	
③③	な でんやま 那殿山のメノウ さんしゅつち きがん 産出地と奇岩及び 周辺建物	未指定 (建造物 ・天然記念物)	懸造りの本堂(那殿観音)は昭和34年の建物。奇岩や窟(いわや)状の地形もあり、那谷寺と並び、古くからの信仰の場であった可能性が高い場所。オパール・メノウの採掘地であった歴史もある。	
③④	やわた 八幡を中心とする くたにやまき とうちよう 九谷焼の陶彫 おきもの (置物)	未指定 (無形(工芸技 術)・民俗資 料)	明治3年(1870)に開窯した松原新助により、小松八幡で創始された彫陶(置物)製作技術と型。勝木作太郎など、多くの名工を生みだし、今に受け継がれている。小松九谷の特徴の一つ、「連房式登窯」と関係の深い資産。	
③⑤	あたくみんねんじ 安宅愍念寺の たんころ石の擁壁	(未指定) 建造物	現本堂は、文政13年(1830)の建築で、擁壁は明治時代の造成と考えられる。たんころ石は、地元凝灰岩を削り抜いた円形の建築部材で、土止めや基礎とした。安宅町内に多く残存し、近代の石文化を示す土木遺産としても貴重。	
③⑥	たきがはらいし せきざいかこう 滝ヶ原石の石材加工 ぎじゆつ 技術	(未指定) 無形 (技術)	地元滝ヶ原石による伝統的な彫刻作成技術。同石材による作品は、市内各所にあり、石切り場とともに、石文化の継承に欠かせない工芸技術。	
③⑦	たき が はらはちまんじんじや 滝ヶ原八幡神社 おおとりい 大鳥居	未指定 (建造物)	地元滝ヶ原石で製作された大型の鳥居。明治23年(1890)に北海道に渡り、坂本木材合名会社を設立し財を成した坂本竹次郎氏により、昭和19年(1944)に寄贈された。	
③⑧	おおみやじんじや せきば 大宮神社の石馬	未指定 (工芸品)	昭和18年(1943)に奉納された石馬。馬子とセットの石像で、国府地区に類例が比較的多くみられる。石材は滝ヶ原石とみられ、巨大な石塊を境内に運び込み、その場で彫刻された。	
③⑨	こうだじんじや へんがく 河田神社の扁額	未指定 (工芸品)	かつて河田神社の鳥居に掲げられていた大型の扁額で、龍の見事な彫刻が施される。昭和12年(1937)奉納の鳥居に掲げられていたもの。石材は滝ヶ原石で、国府地区における滝ヶ原石の広がりを示す資料。	



構成文化財予定の写真一覧

①那谷・菩提・滝ヶ原碧玉産地



①滝ヶ原碧玉露头



②八日市地方遺跡出土品（製玉資料）



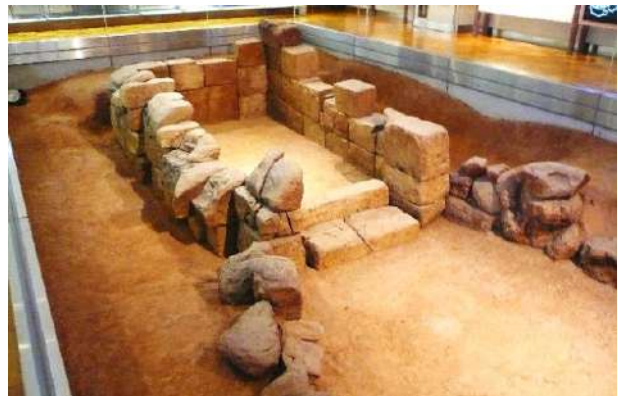
③八日市地方遺跡



④片山津玉造遺跡出土品



⑤河田山古墳群の石室



⑥河田山古墳群出土品



⑦十九堂山遺跡石塔群





⑧ 仏御前墓



⑫ 小松城本丸櫓台石垣



⑨ 滝ヶ原石造多層塔



⑬ 小松城本丸西側石垣



⑩ 滝ヶ原下村八幡神社遺跡



⑭ 鶴川石切丁場 (ハニベ岩窟院)



⑪ 観音下白山神社境内遺跡



⑮ 遊泉寺石切丁場





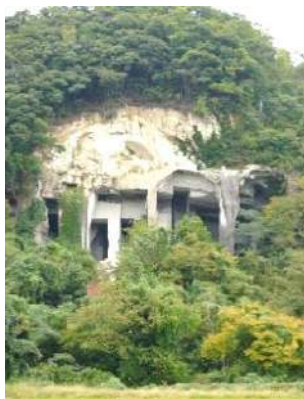
⑩滝ヶ原石切丁場



滝ヶ原石切丁場



⑪観音下石切丁場



⑱滝ヶ原アーチ石橋群



⑳東酒造（石蔵）



㉑松雲堂



⑳石工道具



㉒花坂陶石山





⑳九谷焼製土場  
(九谷セラミック・ラボラトリーほか)



㉑金平金山



㉒連房式登窯



㉓遊泉寺銅山



㉔錦窯 (錦窯展示館)



㉕那谷寺 (本堂ほか5棟)



㉖尾小屋鉱山・尾小屋マインロード





⑩那谷寺庫裏庭園



⑭八幡を中心とする九谷焼の陶彫（置物）



⑪前川水路護岸群



⑮安宅愍念寺のたんころ石の擁壁



⑫日用川の石垣



⑯滝ヶ原石の石材加工技術



⑬那殿山のメノウ産出地と奇岩及び周辺建物



⑰滝ヶ原八幡神社大鳥居



③⑧大宮神社の石馬



③⑨河田神社の扁額





## 日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
27	『珠玉と歩む物語』小松～時の流れの中で磨き上げた石の文化～

## (1) 将来像 (ビジョン)

## 1. 「次世代都市こまつ」へ

小松市では、2024年に北陸新幹線小松開業を迎え、新たな交流時代に対応した10年・20年先を見据えて動き出し、2050年ゼロカーボンシティ宣言をはじめ、新たな総合戦略や観光ビジョンの策定などを開始している。SDGs未来都市認定や住みよさランキング全国8位、介護・高齢化対応度調査全国1位、多様な働き方ができる自治体全国1位などの評価は、空港―新幹線駅間のアクセスの良さやワーケーションにも適した豊かな里山環境と光ファイバー網が整備された利便性が評価を受けたものであり、現在も里山を中心に交流滞在施設の整備が進んでいる。以上、今後小松市の発展にキーとなる地域は、まさに日本遺産「石の文化」の構成資産がある里山地域と重なっており、これからの文化観光の資源として活かし磨き上げる。さらに、もう一つの日本遺産「北前船寄港地安宅」とも連携し、石材の積出港であった歴史やタンコロ石の護岸など「石の文化」と一体として取り組み、海から山までをカバーした魅力ある素材を提供することで来訪者が小松を選択する理由となるよう、交流人口の拡大や里山への定住を目指していく。

併せて、小松市のアイデンティティとして、「歌舞伎のまち小松」とともに「石の文化」とそこから派生する「ものづくり文化」は、双壁を成すものと位置付けられており、小松の代名詞となるよう取り組んでいく。地域の誇りや愛着を育むとともに、シビックプライドとして継承していくものとして、新総合ビジョンや観光ビジョンに位置付けていく。

## 2. 「石の文化」による持続可能な地域活性化

これまで認定地域を「小松まるごとストーンミュージアム」と位置付け、「人づくり」をテーマに地域活性化に取り組んできた。この基盤を活かし、次の世代にも継承していくため、「石の文化」を主目的とした「文化観光」を展開していく。空港と新幹線という2大交通網が揃う強みを活かし、日本遺産ストーリーが持つ「文化」・「自然」・「ものづくり」を体感することにより、交流人口、関係人口、定住人口の拡大につなげ、地域活性化を行う。

また、九谷焼や石材産業など「ものづくり」文化も日本遺産ストーリーの柱である。地元住民や観光産業に関わる人だけでなく、「ものづくり産業」の需要拡大につなげ、経済効果を生み出す好循環へシフトしていく。

小松市では、日本遺産「石の文化」をふるさと納税制度のなかでPRポイントの一つに挙げ、伝統文化や自然環境などの保護や磨き上げを行う「地域の宝」活用コースを設けている。「文化観光」や「産業観光」、生業の発展による収益増だけでなく、地域活性化計画による関係人口（応援する人々）の増加により税収額全体を維持させ、文化財の保存継承への再投資により、地域の文化や歴史が持続可能な「次世代都市こまつ」を目指していく。

(2) 地域活性化計画における目標

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①-A：石の文化拠点施設への来館者数

年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	192,467	122,200	111,615	122,200	183,000	292,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	石の文化拠点施設の入館者数合計の増減により把握。2021年を下限に2022年は前年比10%の回復、2023年の途中から新幹線駅に観光交流センターがオープンすることから大幅増を見込む。					

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①-B：石の文化拠点施設への回遊率

年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	2.9%	2.4%	3.0%	3.4%	6.8%	11.2%
目標値の設定の考え方及び把握方法	拠点施設の内、最大集客の那谷寺に対する他施設の平均値との割合で回遊者の増減を把握。2022年は前年比15%増を見込む。2023年の途中から新幹線駅に観光交流センターがオープンすることから大幅増を見込む。					

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること

指標②-A：アンケート調査による「石の文化」を誇りに思う人の割合

年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	158%	156%	集計中	160%	165%	170%
目標値の設定の考え方及び把握方法	アンケート調査により石の文化に誇りを感じると回答した住民の割合。2017年を100%とした指標で毎年5%増を見込む。					

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－A：九谷セラミック・ラボラトリーの入館者数						
年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	7,312人	4,912人	5,816人	6,300人	8,100人	10,500人
目標値の設定の考え方及び把握方法	石の文化ストーリーを体感できる施設で、体験料金が主たる収入であり、入館者増と収支が比例する。2021年を基準に2022年は約10%回復、2023・2024年は前年比30%増を見込む。					

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－A：日本遺産の構成文化財がき損滅失していない割合						
年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	100	100	100	100	100	100
目標値の設定の考え方及び把握方法	構成文化財が見学可能な状態で残存している割合。					

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－A：地域の外国人宿泊者数						
年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	22,200人	2,984人	1,408人	1,550人	10,000人	23,000人
目標値の設定の考え方及び把握方法	外国人観光客は、構成文化財那谷寺に多く訪れており、宿泊する割合が高いため、経済効果の指標とする。市内宿泊施設からの報告数で、2021年を基準に2022年は10%回復を見込む。2023年からは、インバウンド回復を見込み7倍増とし、2024年はコロナ禍前の水準を目指す。					



### (3) 地域活性化のための取組の概要

#### ■本計画の基本的な方針

これまで市内に分布する構成文化財を面で結びつけて、「小松まるごとストーンミュージアム」と位置付け、観光インフラや学びの拠点として常設展示施設を整備するとともに、地域住民による新たな文化資源の掘り下げや、地域活性化団体による受け入れ体制整備などを行ってきた。この基盤を活かしつつ、次世代にも継承していくことが必要であり、推進体制を強化していく。合わせてマイクロツーリズムや小人数でのプレミアムな滞在型観光などにマッチした資産を活かし、「学び」や「体験」による誘客力のあるコンテンツづくりを行うことで宿泊滞在や地域での消費を増やしていく。

「石の文化」の原点、八日市地方遺跡の地である新幹線駅高架下では、観光交流センターの整備が予定されており、小松のゲートウェイと位置付け、日本遺産のガイド機能を持たせることで、各石の文化拠点とハブ&スポークでつなぐ中核とする。各拠点施設や地域への誘客促進については、2次交通の課題克服に取り組み、地域活性化と民間資本の継続的な参画、人が訪れることによる構成文化財の維持という好循環を生み出していく。

「石の文化」は、九谷焼や石材産業など「ものづくり」文化がもう一つの柱として存在している。国内外に向けた情報発信による認知度向上は、誘客効果のみでなく生業の需要拡大にもつながっている。九谷セラミック・ラボラトリーなどの拠点施設や「GEMBA プロジェクト」を通じた発信を続け、新たなビジネスチャンスを掴むとともに「ものづくり産業」の継承発展や産業観光の自走化につなげていく。

文化財や文化資源の保護・活用については、3年計画で「文化財保存活用地域計画」を定め、計画に沿って進めていく。

#### 取組1：地域団体の連携による組織強化と市の総合計画・交流ビジョンへの位置付け

各地で設立された活性化団体について、日本遺産サミットで連携事業を実施したことを契機として関係の強化を図り、年間を通じた発信を行っていく。将来的には、協議会と地域団体の連携体制を目指す。合わせて総合プロデューサーとなる人材が全体を牽引できる形とし、協議会の役割を明確化し、ビジョンの共有を図り、担い手としての地域プレイヤーを育成していく。さらに、ものづくり産業での「こまつ KUTANI 未来のカタチ実行委員会」や「小松ものづくり未来塾」におけるリーダー間の連携関係を強め、民間の優れた人材を登用する市の観光交流プロジェクトマネージャーや地域力総合アドバイザーとも連携や共同事業を進め、「文化観光」から「産業観光」、ものづくり産業の発展につなげる。

また、市が新たに「次世代都市こまつ」へ始動することを契機とし、「石の文化」を「こまつ新交流ビジョン」へ位置付けるとともに、「文化財保存活用地域計画」とも連動させる。市の総合ビジョンとして明確化することにより、「歌舞伎のまち」や「北前船寄港地安宅」など他の歴史文化資源との連携を強化し、まちづくり計画、豊かな里山環境を活かした取り組みなど、相乗効果を上げる。これまで以上に情報分析やマーケティングを強化し、「石の文化」を小松市の計画、まちづくりに反映していく。

#### 取組2：新幹線開業に向けた新たな整備、ストーリー体験の整備拡大

2024年春の北陸新幹線開業を控え、これを起点した新たな文化観光に取り組む。新駅舎

では、待合室などの装飾に構成文化財である九谷焼や滝ヶ原石、観音下石を活用し、小松の玄関口での石の文化の発信を行う。加えて駅舎併設予定の観光交流センターにおいて、「石の文化」の原点である八日市地方遺跡の展示や各拠点地域の紹介、誘客などガイダンス機能も持たせて各拠点へと導く。また、日本遺産サミットの検証結果により、シャトルバス運行は有効でないと判断し、公共交通機関とシームレスでつなぐシェアサイクルによる2次交通の強化を行い、エコツーリズムとも連携し小松駅を起点とするモデルルート造成やサイクルポートの設置など整備を進める。さらに、市の次世代型地域交通整備（バス路線網の最適化、小松版 MaaS 導入）とも合わせて、相乗効果を図っていく。

滝ヶ原の成功例から、エコツーリズムはインバウンドに希求する要素と捉え、受け入れ環境を整備・強化を推進し、里山滞在施設とも連携し、滞在型観光やワーケーションなど里山での利用拡大を図る。また、「カラミのまち」が新たに加わった尾小屋鉱山など日本遺産を体感するための解説看板や誘導看板整備などの環境整備を計画的に進め、さらに、2023年「加賀立国1200年」を契機に河田山古墳跡資料館を再整備し、八日市地方遺跡から石室墳築造、加賀国府設置に至るまでの歴史ロマンを発信する「（仮称）加賀国府ロマン館」へのリニューアルを行う。合わせて国府地区「石の文化」を掛け合わせたまち歩きを整備し、サブストーリーを体感できる仕組みを構築していく。

九谷焼では、拠点施設での体験事業をベースに、首都圏での発信や産地間の連携、伝統工芸による広域連携を継続・発展させることで、販路拡大や産地への誘客に努め好循環を生み出し、産業観光の推進（GEMBA プロジェクト）を進め、ワークショップや日本遺産サミットでの試行を検証し、自走化に向け持続可能なシステムに発展させ行く。

また、各拠点地域でも、コロナ禍で中断しているイベントや見学ツアーの再開を支援し、地元活性化団体の存続やストーリーの語り部を育成し、構成文化財の維持を図る。

### 取組3：学校教育への活用と地域内への浸透促進

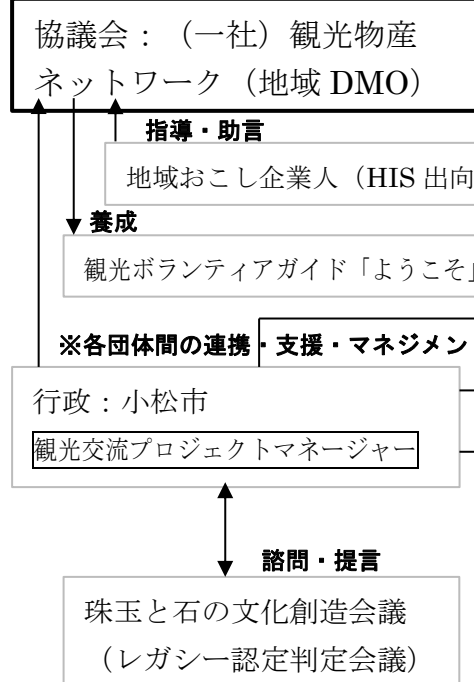
認定後、教育委員会と協力して副読本を作成し、市内小学校5年生全員への配布してきた。今後は、さらに連携を進めるとともに、構成文化財を実際に見学し地域の人とともに学ぶことで、より愛着を持ち心に残る形で発展させていく。また、交流が定着したAIRを通して、市内高等学校でのワークショップや展示を通じた体験を行うとともに、海外への発信にもつなげていく。また、遊泉寺銅山跡や滝ヶ原地区など大学連携による地域活性化や調査研究事業を継続し、歴史・文化の弱い部分である中間層（20～40代）への普及を図る。石の文化レガシー認定は着実に対象地域を広げてきており、さらに推進することで新たな「石の文化」掘り起こしと、関わる人々の増加を図っていく。

### 取組4：情報発信

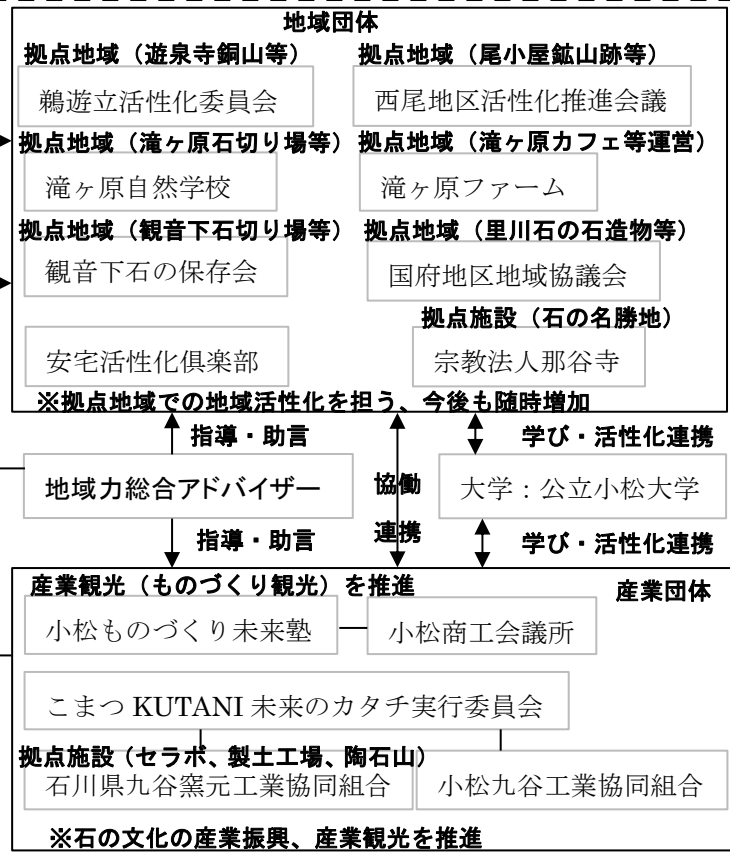
新幹線開業に合わせて強化されるプレスツアーや全国メディアとのタイアップ企画などと連動し、教育旅行の誘致や「珠玉と歩む小松」を柱とした誘客プロモーションを展開する。また、日本遺産サミットを契機として始まった「石の文化」日本遺産との広域連携を進める。さらに、大型プロモーションに合わせて、各ホームページの充実や情報の更新、各プロジェクトページの相互リンクなど、これまで以上にSNS発信を強化し、ニーズの把握や情報発信を行っていく。

#### (4) 実施体制

※会員企業と石の文化推進事業を実施  
(旅行商品、土産品開発・販売等)  
SAVORJAPAN・産業観光連携事業の推進



「石の文化」推進連携会議 ※団体間の連絡調整、連携事業の実施等



#### [人材育成・確保の方針]

総合プロデューサー的役割を果たす人材については、協議会(地域DMO)にいる地域おこし企業人や、新幹線駅に整備される観光交流センターを拠点に活動予定の観光交流プロジェクトマネージャーらの優れた民間のノウハウを活かし、長期的に関わる人材を育成していく。また、地域団体の代表やこまつ KUTANI 未来のカタチ実行委員会及び小松ものづくり未来塾の代表などキープレイヤーとも連携し、地域力総合アドバイザーの指導・助言を得ながら育成・確保を図っていく。

地域プレイヤーについては、観光ボランティアガイド養成継続し、地域ガイドの質の向上を図る。さらに、レガシー認定により新規地域を開拓し、関係人口の拡大を継続し日本遺産の裾野を拡大していく。

学校教育では、他地域との「石の文化」連携授業による学び合いを継続するとともに、各小学校と地元構成文化財との関りを深めていき、語り部としての活動や新しい「石の文化」の提案など、実践的なものとしていく。中高生には、AIRを通じたワークショップを切り口に石の文化や世界に目を向けた人材育成に取り組む。大学では、地元公立小松大学を中心に、これまでの拠点地域での地域活性化ゼミ活動を継続するとともに、石材や地質など学術調査のフィールドとしても開放し、将来的な担い手や関係人口(応援団)の拡大に努めていく。

さらに、石の文化創造会議(現レガシー認定判定会議)には学術経験者や文化財所有者、デザイナーや建築士、生業関係者が含まれており、全体を通して助言や総括、効果の検証を行う機関として提言をいただき、プランの見直し等を図っていく。



#### (5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

日本遺産サミット開催を契機として、協議会である（一社）こまつ観光物産ネットワークや地元地域団体、「こまつものづくり未来塾」など産業団体の代表者らによる実行委員会を組織した。この会議体を「石の文化」推進連携会議として発展継承し、日本遺産拠点地域間や産業団体との連携や事業協力体制を構築していく組織として運営し、さらに、物販業者や観光業者が組織の中核である協議会との連携強化を図ることで、相乗効果による自立・自走化に取り組んでいく。

資金確保については、既に取り組んでいる地域や業界で稼ぐ仕組みを継続し、全体の消費額を向上させていく。滝ヶ原地区では、既に石の里のガイド事業を地元で行っており、その料金を草刈り等、維持管理費に充てている。また、石切り場の風景や里山の農村風景を活かし、民間がカフェや滞在型宿泊体験施設を運営しており、国内外から利用者が訪れている。他の拠点地域でも、民間による宿泊施設やレストランが整備される地域があり、ワーケーションなどの滞在型プランと連携し、新たな付加価値を高め、地区内で消費される仕組みの構築やガイドを有料化するなどの取り組みを推進する。

ものづくり産業では、産業観光「GEMBA プロジェクト」を推進し、参加企業の増加や開催回数を増やすなど、恒常的な収入を目指す。加えて、メディアへの露出や情報発信の取り組みを継続し、本来の産業としての利用拡大につなげ、生業を維持していく。九谷焼産業でも、九谷セラミック・ラボラトリーを拠点に、体験事業や新商品開発、物販事業を強化し、運営資金を確保していく。

協議会本体である（一社）こまつ観光物産ネットワークは独立した法人であり、今後、着地型旅行商品のプロモーションなど観光事業を通して旅行客の増加を図ることで、駅や空港の直営店での販売増につなげ、収入の安定化につながる。また、ふるさと納税の返礼品に会員の商品を提案・納入することで業界全体の売り上げ増をもたらす。また、日本遺産の魅力を発信することがふるさと納税制度の「地域の宝」活用コースの増収につながり、さらに構成文化財である九谷焼の返礼品が増えることで、九谷焼業界も潤う好循環を生みだしていく。

協議会を起点に、地域団体及び産業団体の取り組みがつながり、好循環を生み出す仕組みづくりに取り組む。

#### (6) 構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

小松市では、認定を契機に小松市「珠玉と歩む物語」保護条例を制定し、市の観光ブランドの一つとして位置付け、市全体の取り組みとして進めてきた。市独自の石の文化レガシー認定制度を創設し、新たな石の文化を掘り起こすとともに、地域の誇りとして取り組み関係人口の拡大に取り組んできた。さらに、レガシー認定を受けた石の文化資源を日本遺産構成文化財に追加申請を行い、その枠組みの中で保存活用を可能とし、行政的支援の対象にもできることとすることで着実に保存活用が行われるようになってきている。

新たに加わった地域や資産には、解説看板など基本的な観光インフラ整備を行うことで、認定だけで終わらず継続して地域の文化財として守り伝えるものとなるよう取り組んでいく。また、小学校向けに作成した副読本や地域学習教材の活用や、地域の語り部による体験事業によって構成文化財を大切に作る心を育み、保存活動にもつなげていく。

九谷焼や石材産業など伝統的なものづくり分野においては、各産業が活気づき。収入を上げることが構成文化財の維持につながる。今後も、産業観光の仕組みを継続することで新たな価値付けと、維持管理サイクルの構築を行っていく。

行政としては、ふるさと納税制度に「地域の宝活用コース」を設けており、学びや普及事業を通して関係人口（ファン）の拡大を図り、文化財活用が保存意識の向上へとつなげ、文化財の保存を適切に進める好循環を構築する。

現在、市として「こまつ新交流ビジョン」や総合計画などの新たな指針作りを行っている。これを契機に、市の「文化財保存活用地域計画」の策定を3年計画で予定しており、文化財保存・活用の中長期計画の中に日本遺産を反映させるとともに、他の行政計画への位置付けを行うことで持続可能な取り組みとしていく。あわせて、「石の文化10年プラン」の見直しを行い、計画的な取り組みを永続的にやっていく。

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

事業名	連携強化による組織強化		
概要	各地の活性化団体などとの連携強化と調整、各地の団体が維持される仕組みの確立、事業全体の総括を行う組織整備		
	取組名	取組内容	実施主体
①	協議会の日本遺産事業における役割明確化	協議会は、民間事業者が会員となり、収益を上げる組織であり、地域 DMO として公益事業も実施している。その中で、日本遺産事業における役割を明確化し、地域活性化事業を推進していく。	協議会 小松市
②	総合プロデューサーの確立と担い手確保	観光交流プロジェクトマネージャーや地域力総合アドバイザーを活用し、各団体の動きを総合的に統括する人材の確立を図り、地域プレイヤーを確保していく。	協議会 小松市
③	石の文化推進連携会議による組織強化	日本遺産サミット開催を契機に協議会、地域団体、ものづくり産業団体が参画した「石の文化」推進連携会議を立ち上げ、団体間の連絡調整や連携事業の実施等、相乗効果図るための場として発展継承し、関係団体の連携強化を行う。	協議会 民間 小松市
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		4 団体
2020年			9 団体
2021年			9 団体
2022年	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		10 団体
2023年	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		11 団体
2024年	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		12 団体
事業費	2022年：200 千円      2023年：200 千円      2024年：200 千円		
継続に向けた事業設計	「石の文化」・「ものづくり文化」が地域のアイデンティティという認識を維持し、各団体が順調に収益をあげることが、地域及び業界の存続や地域活性化につながる仕組みづくりを行う。それにより事業を継続するとともに、効果の可視化により行政的支援の継続を行う。		



(7) - 2 戦略立案

(事業番号 2 - A)

事業名	中長期計画に基づいた事業展開		
概要	日本遺産の取り組みを地域の各種計画の中へ位置付け、それに沿った事業展開を計画し、見直しや変更にも柔軟に対応する体制の整備を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	こまつ新交流ビジョンへの位置付け	現在、策定中の新たな観光交流ビジョンにおいて、文化観光推進と文化財活用の観点から、交流人口増加の資源として位置付けを明確化し、新幹線開業に合わせた施策の一環として取り組むことで、相乗効果を生み出す。	小松市
②	文化財保存活用地域計画との連動	令和4年度より、文化財保存活用地域計画を策定する計画であり、日本遺産「石の文化」を市の歴史文化の特徴を示す関連文化財群の一つとして位置付け活用することで、構成文化財の保存を持続可能にしていく。	小松市
③	「石の文化 10 年プラン」の見直しと中間評価体制の確立	上記新ビジョンや法定計画との整合性を図るため、平成28年度策定の「石の文化 10 年プラン」の見直しを「石の文化創造会議」で行う。さらに指標の把握や共有を行い、計画や事業の修正、改善を行っていく。	協議会 小松市
④	マーケティングやデータ分析の活用強化	さらに、プレスツアーなどプロの目から見た評価、来訪者の数値や評価、アンケートなど様々な視点からデータ分析を行い、10年プランの見直しに反映する。	協議会 小松市
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年			2
2020年	日本遺産との関係性を明確化した行政計画の数		2
2021年			2
2022年			3
2023年	日本遺産との関係性を明確化した行政計画の数		3
2024年	日本遺産との関係性を明確化した行政計画の数		4
事業費	2022年：9,252千円 2023年：5,300千円 2024年：4,700千円		
継続に向けた事業設計	市全体の観光や文化財の長期計画に位置付けることで、市の新総合ビジョンに反映していく。それにより、都市計画や景観計画などにも影響を与え、日本遺産の取り組みを永続的にすることができる。また、データを収集し、分析評価することで限られた原資を必要なところに注入でき、効果的な事業を持続することが可能となる。		

(7) - 3 人材育成

(事業番号3-A)

事業名	現基盤を活かした人材の育成と確保		
概要	日本遺産に関わる人材の育成及び能力向上と、関連の深い産業の発展を図り、新たなプロジェクトリーダーや事業の継続・担い手を確保する		
	取組名	取組内容	実施主体
①	観光交流プロジェクトマネージャーや地域力総合アドバイザーとの連携と協働	新幹線駅の観光交流施設を活かすため採用される高度なスキルを持つ人材の指導や助言を得ながら、日本遺産を活用する人材のスキルアップを図る。	協議会 小松市
②	観光ガイド育成継続	観光ガイドの新規募集、養成講座、研修会を継続して行い、ガイド人材の確保及び育成を行う。登録されたガイドは、市及び協議会、日本観光振興協会、南加賀商工観光推進協議会のHPで告知、協議会HPを介して予約・派遣を行う。将来的には、新幹線開業に合わせ整備する観光交流センターでの運用を図っていく	協議会 小松市
③	ものづくり産業継承者の支援	「石の文化」による地域の発展には、石材業や九谷焼など伝統産業の発展・継続が必要不可欠である。技能継承支援制度や地域産材利用促進制度を継続し、活用人材だけでなく担い手の確保を行い、両面での活性化を行っていく。	小松市
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	日本遺産をガイドする人材の数		38人
2020年			45人
2021年			50人
2022年	日本遺産をガイドする人材の数		55人
2023年	日本遺産をガイドする人材の数		60人
2024年	日本遺産をガイドする人材の数		65人
事業費	2022年：8,100千円 2023年：8,100千円 2024年：8,100千円		
継続に向けた事業設計	新幹線開業に向けて、観光振興や地域活性化、伝統産業の振興に長けた民間人材が登用される。彼らと連携し指導を受け、そのノウハウを吸収していくことで、地元で継続的活動できる人材が育成される。 なお、伝統産業については、行政による下支えを行っていく事項であり公費財源を充てていく。		



(7) - 4 整備

(事業番号 4 - A)

事業名	新幹線開業を見据えた新たな整備		
概要	2024 年の新幹線開業に向けた周辺整備に日本遺産を取り入れ、来訪者がストーリーを体感できるようにすることで、相乗効果を生む。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	新幹線駅高架下観光交流センター整備	新幹線小松駅高架下に観光交流センターを整備し、「石の文化」の原点である八日市地方遺跡の展示や日本遺産のガイド機能を持たせ、各拠点施設や地域への誘客を図る。	小松市
③	(仮称) 加賀国府口マン館整備によるサブストーリー展開	2023 年加賀立国 1200 年祭とも連携し、構成文化財の石室や出土品を展示する資料館のリニューアル整備を行う。構成文化財の少ない国府地区のサブストーリー展開による魅力 UP を図る。	小松市
②	新規エリアの日本遺産を体感するための解説看板等整備	補助金事業で行った拠点地域での看板整備と意匠を統一し、レガシー認定等で追加された新規エリアの看板整備を進め、こまつまるごとストーンミュージアムを推進。	小松市
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	石の文化拠点施設への入館者		192,467 人
2020 年			122,200 人
2021 年			111,615 人
2022 年	日本遺産拠点地域・施設の NPS		-60
2023 年	日本遺産拠点地域・施設の NPS		-50
2024 年	日本遺産拠点地域・施設の NPS		-40
事業費	2022 年 : 656,500 千円 2023 年 : 3,000 千円 2024 年 : 3,000 千円		
継続に向けた事業設計	小松市が 2024 年に北陸新幹線の開業を控えた転換点にあり、様々な整備に併せた事業を展開することで、開業効果をスムーズに受けることができ、持続可能な施設としていく。イニシャルコストは行政負担となるが、運営は協議会や指定管理者、民間施設の協力を得ていく。		

(事業番号 4-B)

事業名	新幹線開業を見据えた移動手段の強化		
概要	2024年の新幹線開業に向け、空港や駅からの移動の利便性を高め、「石の文化」の各拠点施設や地域への来訪者増を図る。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	2次交通の強化	新幹線開業に合わせ、駅を中心に市内各所にサイクルポート及びシームレスでつなぐ電動アシスト付き自転車を設置し、各拠点地域へのアクセスを改善。	協議会 小松市
②	バス路線網の最適化、小松版 MaaS 導入	新幹線開業に合わせ、バス路線の最適化及び小松版 MaaS の導入が準備されており、①との連携や観光事業とも連携させたシステム構築により交流人口の拡大を図る。	小松市
③	①②を活かしたモデルルートでの造成発信	新たな拠点施設と交通手段の整備を活かし、新たな見学コースの造成やサイクルスポーツにも対応したルートづくりを行い発信していく。	協議会 小松市
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年			—
2020年			—
2021年			—
2022年	シェアサイクルの利用者数		300人
2023年	シェアサイクルの利用者数		3,500人
2024年	シェアサイクルの利用者数		5,000人
事業費	2022年：48,000千円 2023年：18,000千円 2024年：16,500千円		
継続に向けた事業設計	小松市が2024年に北陸新幹線の開業を控えた転換点にあり、新たな交通体系の整備が進むことから、連動した観光整備を進める。イニシャルコストは行政負担となるが、運営は協議会、民間施設の協力を得るとともに、シェアサイクルは利用料収益での運用を目指す。		

イメージ図





(7) - 5 観光事業化

(事業番号5-A)

事業名	ストーリー体験コンテンツの造成		
概要	地元主催のツアーやイベントから、産業観光や九谷焼体験に加え、総合的に体験する着地型旅行商品など、各階層に希求するストーリー体験を提供する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	拠点地域での継続型イベントや受け入れ態勢の強化	滝ヶ原地区の石切り場や石橋見学ツアー、石工体験、里山ステイ、観音下地区の石切り場やアート作品見学、尾小屋鉱山跡や鉱山町巡り、遊泉寺銅山跡のトレッキングなど、地域イベントの質を高め、構成文化財の体感機会を提供する。	民間
②	産業観光の推進（GEMBAプロジェクトの推進と発展）	工場の受け入れ環境、団体・教育旅行の受け入れ体制、モデルコースを整備し、日本遺産ものづくり現場を体感する産業観光の継続開催を行う。発信はHP やチラシ、メディアを活用し、整備済みの予約や事前決済システムを通して提供。	民間 小松市
③	九谷焼の体験商品販売と消費拡大	ストーリーを体感できる九谷セラミック・ラボラトリーの入館者を増やし、九谷焼の絵付けや成形体験、物販の強化を図る。発信・予約は、施設HP、じゃらんやSow experienceで実施。	民間
④	着地型旅行商品のプロモーション	①～③やSAVORJAPAN認定とも連携し、地域おこし企業人（HIS派遣）の協力を得ながら、着地型旅行商品の開発、プロモーションを行う。商品の予約・販売は、会員企業である旅行会社が主体となっており、大手旅行社とタイアップも図る。	協議会
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	セラボクタニ体験者人数（有料）		1,579人
2020年			2,550人
2021年			2,342人
2022年	セラボクタニ体験者人数（有料）		2,800人
2023年	セラボクタニ体験者人数（有料）		3,900人
2024年	セラボクタニ体験者人数（有料）		5,800人
事業費	2022年：29,225千円 2023年：29,225千円 2024年：29,225千円		
継続に向けた事業設計	旅行商品の開発には地元旅行会社とHISからの派遣社員、産業観光は日本観光振興協会の指導、九谷焼体験は作家が直接指導するなど、専門家による指導の下、内容を磨き上げて商品価値を高めている。体制整備など初期投資は行政が支援するが、ランニングは自走化を目指していく。		

(7) - 6 普及啓発

(事業番号6-A)

事業名	教育への活用と地域内への浸透		
概要	各対象に適した関り方を提供し連動させることで、効果的な普及活動を行い、日本遺産に関わる関係人口の拡大を図る。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	小中学校と連携した普及啓発	地元ガイドや副読本など教材を活用した地域学習の企画及び実施。	小松市 民間
②	石のアートを通じた地元高校との交流	AIR で来訪した海外アーティストの展覧会を企画、あわせて美術コースや美術部の高校生とワークショップによる交流事業を実施する。	小松市 民間
③	大学連携事業の継続	公立小松大学ゼミとの協業による地域活性化の取り組みを、地元団体と連携して実施する。	大学 民間
④	石の文化レガシー認定の推進	①～③で各階層への普及を図り、基盤づくりを行った上で、新たな石の文化を広く市民から公募、関係する地域や人の拡大につなげる。	小松市 民間
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	「石の文化」を誇りに思う人の割合		158%
2020年			156%
2021年			集計中
2022年	「石の文化」を誇りに思う人の割合		160%
2023年	「石の文化」を誇りに思う人の割合		165%
2024年	「石の文化」を誇りに思う人の割合		170%
事業費	2022年：1,550千円    2023年：800千円    2024年：800千円		
継続に向けた事業設計	各学校の学習活動と協力することで、実質負担無く実施できる。海外アーティストとは、オンラインでもつながるように工夫し、継続的に取り組んでいく。 学校間の調整や認定事業については行政が実施し、各事業を「新たな地域の宝」発見につなげ、誇りに思う心を醸成する。		

(7) - 7 情報編集・発信

(事業番号7-A)

事業名	戦略的な情報発信		
概要	北陸新幹線開業に合わせ、プロモーションが強化される。市のブランドイメージとして定着させ、大規模プロモーションを展開していく。また、その特需後を見据え、合わせて地道な HP や SNS 発信の強化を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	メディアを活用した魅力発信	観光部門が実施するプレスツアー、インフルエンサープロモーション、全国メディアタイアップ企画と一緒に「石の文化」を発信、効果分析を行う。	小松市
②	新幹線開業を見据えた誘客プロモーション	観光部門が実施する BtoB、BtoC 向けプログラム登録、旅行事業者及び雑誌社との商談会、インスタグラマーフォトウォークなどと一緒に「石の文化」のプロモーションも実施。	小松市 協議会
③	各ホームページの充実と連携、SNS 発信の強化	「石の文化」ポータルサイトと、拠点地域や施設の HP、SNS アカウントに容易に相互アクセスできるように整備する。また、SNS 発信の強化を行い、関心のある人に確実に必要な情報提供を行う。上記により、既に各施設や地域で立ち上がったシステムの効果を上げていく。	協議会 小松市 民間
④	地域 DMO 及び SAVOR JAPAN と連携した発信	アフターコロナ後のインバウンド回復を見据えて、他省庁認定事業と連携・連動した発信事業を展開する。	協議会
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	石の文化（構成文化財含む）のメディア発信数		24
2020年			39
2021年			133
2022年	石の文化（構成文化財含む）のメディア・SNS 発信数		140
2023年	石の文化（構成文化財含む）のメディア・SNS 発信数		150
2024年	石の文化（構成文化財含む）のメディア・SNS 発信数		160
事業費	2022年：10,327千円 2023年：10,327千円 2024年：10,327千円		
継続に向けた事業設計	行政が行うプロモーション事業は、地域や事業者の協力のもとに成り立っており、地域活性化に資するものとして地方創生推進交付金やふるさと納税などを財源とする。また、既に整備した基盤を活用し強化するものであり、継続可能である。		